

研究の棗

日本古建築研究の棗 (第二十二回)

工學博士 天 沼 俊 一

第三十 扉 (下の二)

(棧唐戸のつゞき)

前號に於いては、鎌倉・室町兩時代の棧唐戸につき、實例をあげて解説をしておいた。この兩時代のは、いはゞ簡單で、棧や框の交叉點には、辻金物も四葉も打たず、また入子板には、せいゝ格狭間・花狭間・連子・單純な透彫等を其一部に入れた位であつたが、これが

桃山時代

になると、總ての交叉點に辻金物・四葉を用ふるの

みならず、其間にも飾金具を打ち、入子板の殆んど全部に彫刻を入れる様になつた。尤も中にはたゞ一ところに丈け入れたのや、また正面は立派にして、裏面は略してしまつたのもあるが、要するに前代に比べて驚くばかり立派になつたので、扉また例の充填式になつたのである。

次に實例を八つ許りあげて記述を試みやう。これ等によりて當代に屬する扉の大體の様式が判れたいのである。八つのうち六つはほんどうの扉で、二つは厨子のである。厨子のは小さいから、

從て簡單であるから、この方から記すのが順序かも知らぬが、こゝには建造物に用ひてあるのからにする。先づ第一に擧げるのは

醍醐寺三寶院唐門の扉である（第一三六圖㊦、前號第一）。此の門今は三寶院前の廣い路に面してゐるから、突き當りの横門に向つて行くときは左手に見えるが、古圖によると、少なくとも明曆六年以前には、三寶院の玄關に向つた右手、即ち現在と直角をなした處に位置してゐたのである。

此の扉は上下框の間に横棧を二本おき、最上の間は連子、次の大廣間には五七の大桐——裏面は菊花——を入れ、最下の間は輪廓を井桁にとり、其中に二本の吹寄對角線が入れてある。これは如何にもよく時代を現はした扉であり、さうして肘壺で柱に吊つてある。中央の横棧の巾が特に廣くしてあるのは、そこへ門をつけるためで、其門を通すための鐵具の足が表の方へ出るのをかくすた

めに、鐵甲型木製釘隠が二つ打つてある。次は瑞嚴寺本堂の扉。瑞嚴寺は宮城縣宮城郡松島村にある、さかくと何でもないが、日本三景の一の松島は寺の門を出たところである。第四百十五圖は其一部で、兩折兩開の下の方を半分丈け示しておいた。全體を寫真に出せばよかつたらうが、夫れでは文様が小さくなり、判りにくくなる虞があるから、態々かうしておいたのである。扉の面の各間に入れた彫刻をかいてみると

雲		花狭間			
桐	桐	桐	桐	瓜	瓜
牡丹に雲	牡丹に雲	牡丹に雲	牡丹に雲	蓮	蓮
水鳥	水鳥	水鳥	水鳥	水	水

である。上の二間は普通の場合の如く巾廣く、桐以下は中堅棧によりて二つに分れてゐる。上の方は寫つてゐないからこれでは判らぬが、瓜以下は觀る通りまことによくできてゐる。瓜は當代から時々建築彫刻の一部に用ひられた。これは肥料が

よくきいたと見えて、大きな立派な實がなつてゐる(木鼻の彫刻に瓜を用ひたのは、高野山奥の院墓地所。在、慶長四年の一間一面の佐竹家廟に用ひてゐる)。

次の蓮も中々よくできてゐる。池のなかゝら満開半開蕾葉などがいき／＼してでてゐる、これも肥料が充分にきいてゐる。最下の水鳥は中堅棧の兩方の間へつけず、この場合向て左の間丈けにして、右の間は水斗りにしておいたのが大によろしい。この水と上の蓮池の水とは、横棧があるに係らず續いてゐるから、この圖案は、池の中から蓮が生へ、其池には水鳥が遊んでゐるところを現はしたのであらう。上の方はないが、この寫眞にでてゐる丈けの文様をみて、上の方の見えぬところも、どの位の程度によくできてゐるか、容易に想像ができるであらう。

棧の辻には四葉が打つてゐる。甚だ叮嚀なもので、其上下左右の間には桐葉を打つてゐるが、元とは何れも鍍金してあつたので、双方ともよく時

代を現はしたものである(第百四圖)。

大徳寺唐門の扉またこの種類で、辻に四葉、左右四葉の間には桐葉、上下の間には長手の飾金具を打ち、また棧は黒塗であるが、其面は箔置にしてゐる。尤もこれは正面丈けで、裏面は横棧ばかりの至極粗末なものだが、夫れにしてもかゝる裝飾法は、當代に行はれた一方法と考へられる。

第三には豊國神社唐門ので、これは第百四十六圖に、前同様一部を示しておいた。これも中堅棧は一本であるが、横棧は下の方が吹寄(最上と最下と夫れ夫れ上下樞に近いから何れも吹寄の如く見えてゐる)になつてゐる、さうして入子板の彫刻は上の方から順に

(正面)

桐唐草	牡丹
花 <small>(入子板あり)</small>	花 <small>(入子板あり)</small>
狭間	狭間
寶相花	寶相花
牡丹葉 <small>(花)</small>	牡丹葉 <small>(花)</small>
岩・波・鯉	岩・波

第四百十四圖

桃山時代扉及花狹間

昭和貳年壹月貳拾六日水曜

不許複製

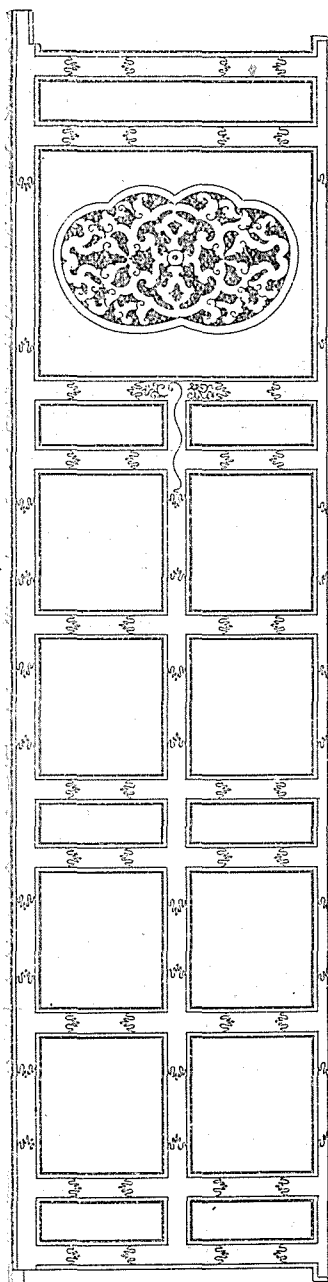
(1)

諏訪神社(乙事)扉花狹間壹部

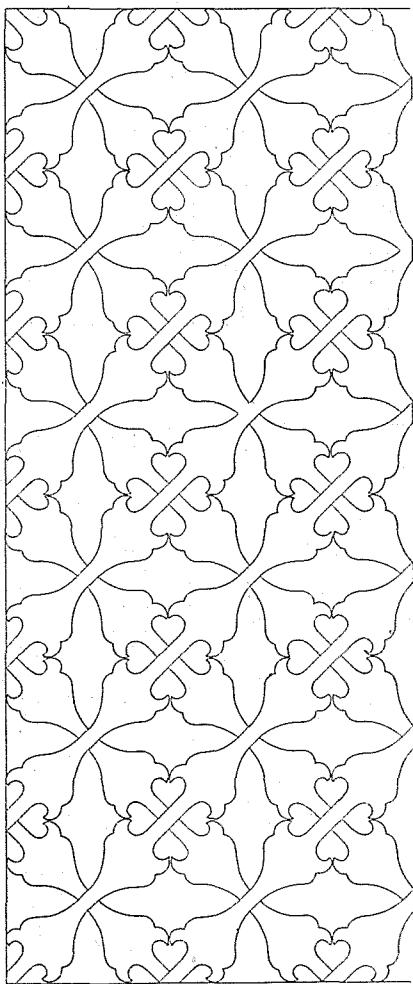
花狹間大さ138X184

(2)

圓形華合前殿長厚扉壹部



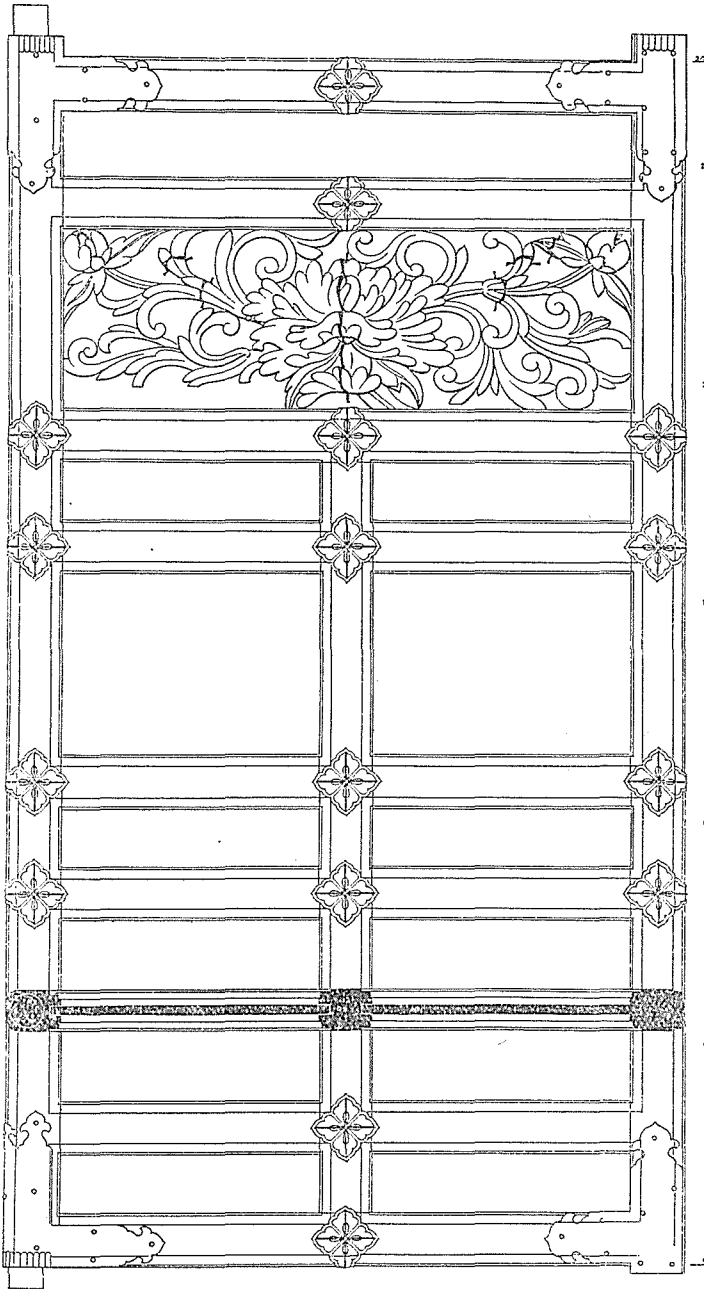
此の扉は、新築であるから、扉の、向て右端に、ある曲尺は、西國に共通である事に注意すべきである。



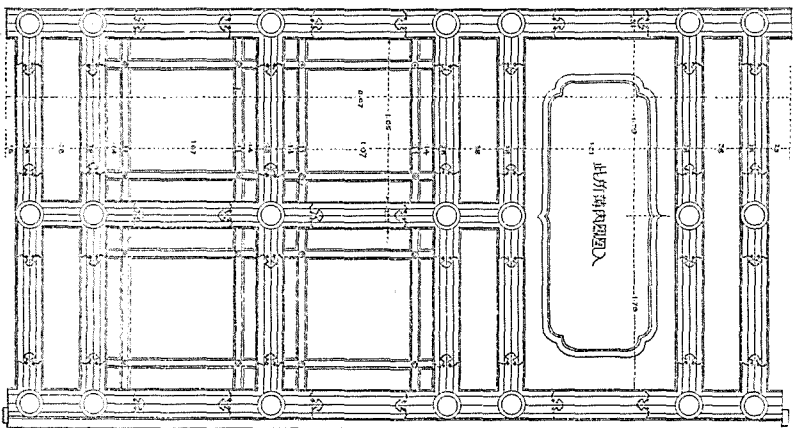
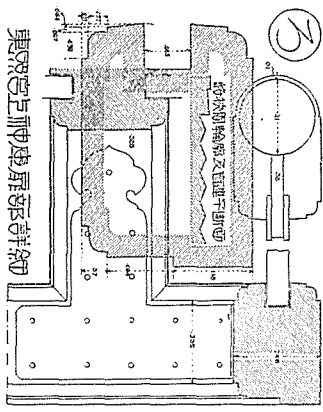
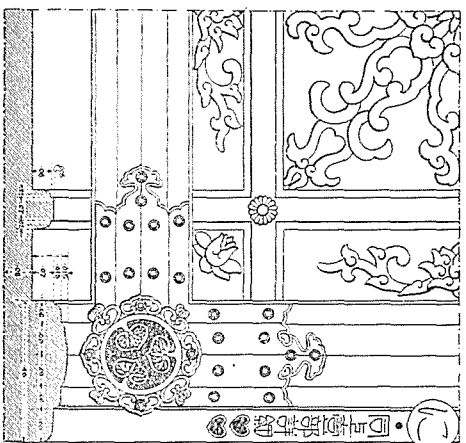
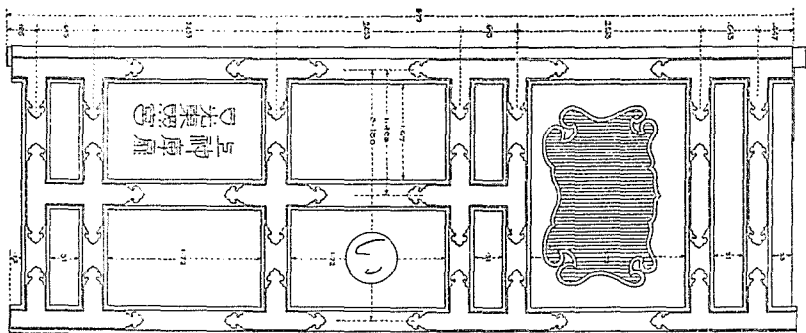
17
16
15
14
13
12
11
10
9
8
7
6
5
4
3
2
1

第百四十參圖 ● ● ● 京都市 ● 六波羅密寺本堂内厨子兩開條唐戸立面及断面圖

此の扉は長敷大守文芳・中宮尺三寸四分余れ未れと書左右扉外迄厚九寸・総堅漆塗・金銀飾金具打仕并在末葉經書塗・昭和三年一月二十八日・金田圖



宗廟神祇圖之時代原意禮 大字・月・敬禮 小字・文・拜・參・月



(裏面)

寶相花	寶相花
酢漿草	酢漿草
岩・波	岩・波・松

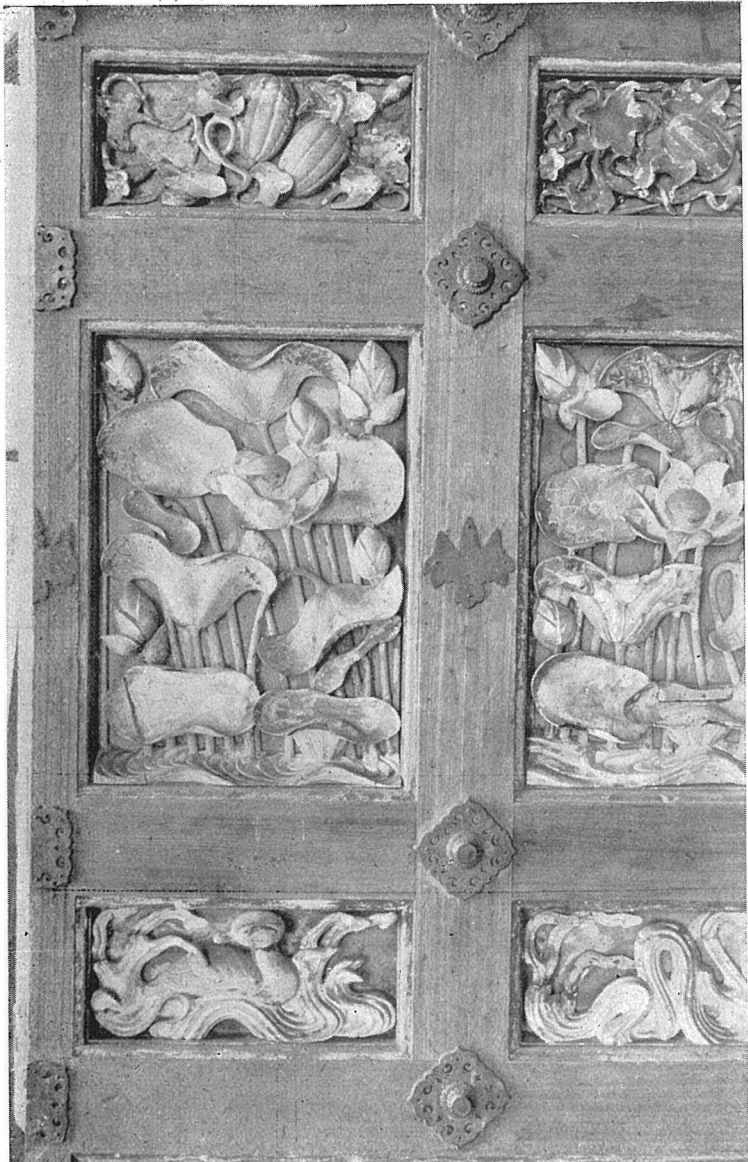
となつてゐる。これは右側の扉である。左側の正面は右と同じだが、裏の最下の間が「岩・浪・竹」(中堅棧の) になつてゐる丈の差である。このうち動物といへば鯉のみで、これは中々うまく刻んであり、よくあゝいふ姿勢をするのを見るが、いゝmoment を捕へたものと思ふ。この鯉のつけてゐる間は中堅棧の一方丈だけで、他方には岩と波とばかり、鯉はない。

其上の間の牡丹唐草もまた、一方即ち鯉のある上は中央に花が咲き、其左右から葉を出してゐるが、隣の間の花がなく、葉許りで唐草ができてゐる。寫真には一番上の桐が見えてゐぬ丈で、あとは皆でてゐるから、これで全部の想像はつくであらう。

正面最下の間の岩波鯉は、裏面になると「岩波松」「岩波竹」になり、其上の間即ち牡丹の裏に當るところと、最上間の桐及び牡丹唐草の裏の間に何も入れてなく、上から二つ目の花狭間は、普通透しになつてゐるのに、この場合には入子板の面に花狭間がとりつけてある(他にもか)ので、其後面には、正面の寶相花より少し形の異つた同じく四瓣の大きな花をつけ、其下の間即ち正面の寶相花に當るところは大きな酢漿草がつけてある。

斯くの如く正背面により少しづつ意匠をかへ、無駄なところは彫刻を省き、放膽なうちにも細心の注意を以て、用意周到にやつてゐるが、扉としては前例より淋しい。其上に棧や框には面がとつてあるではなし、辻金物もたゞ徒に鋸の頭が澤山ある丈で、材料も粗末な鐵であるし、骨になつてゐるところは、どうも大したものではない。こ

とによつたら入子板につけてある彫刻のみが古い

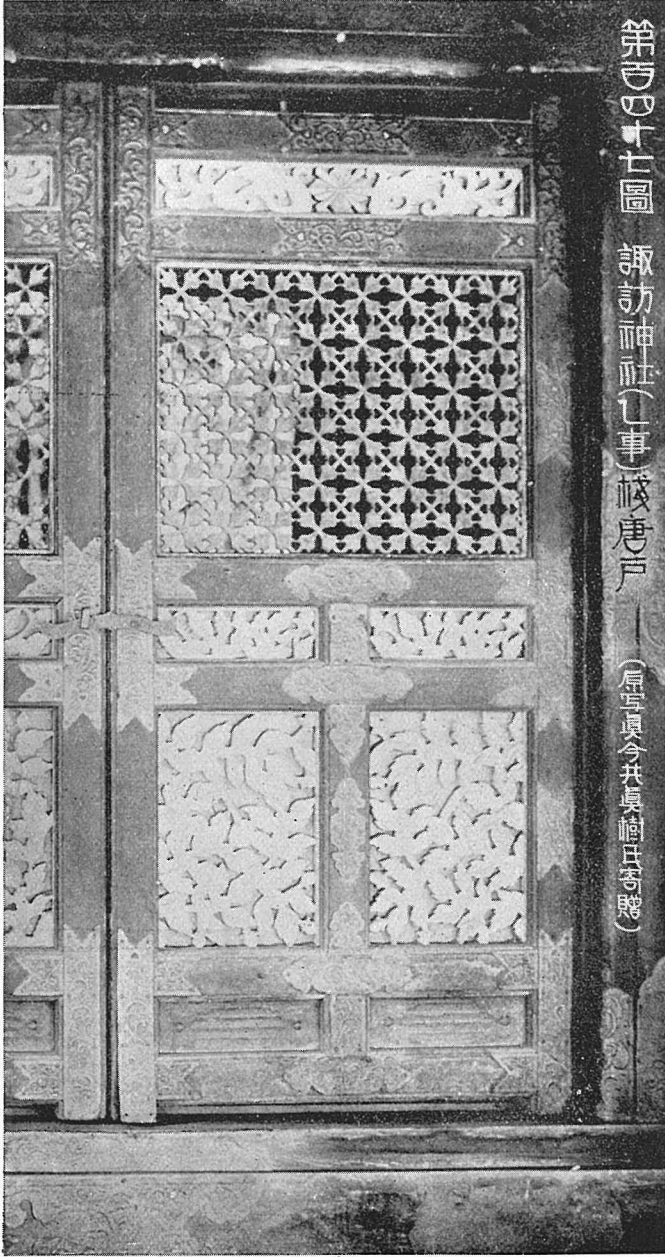


大正十四年四月一日天沼写真

第四百四十五圖 ● 瑞巖寺本堂兩折兩開棧唐戶壹部

第四百十六圖・豊國神社唐内扉壹部(天沼野)

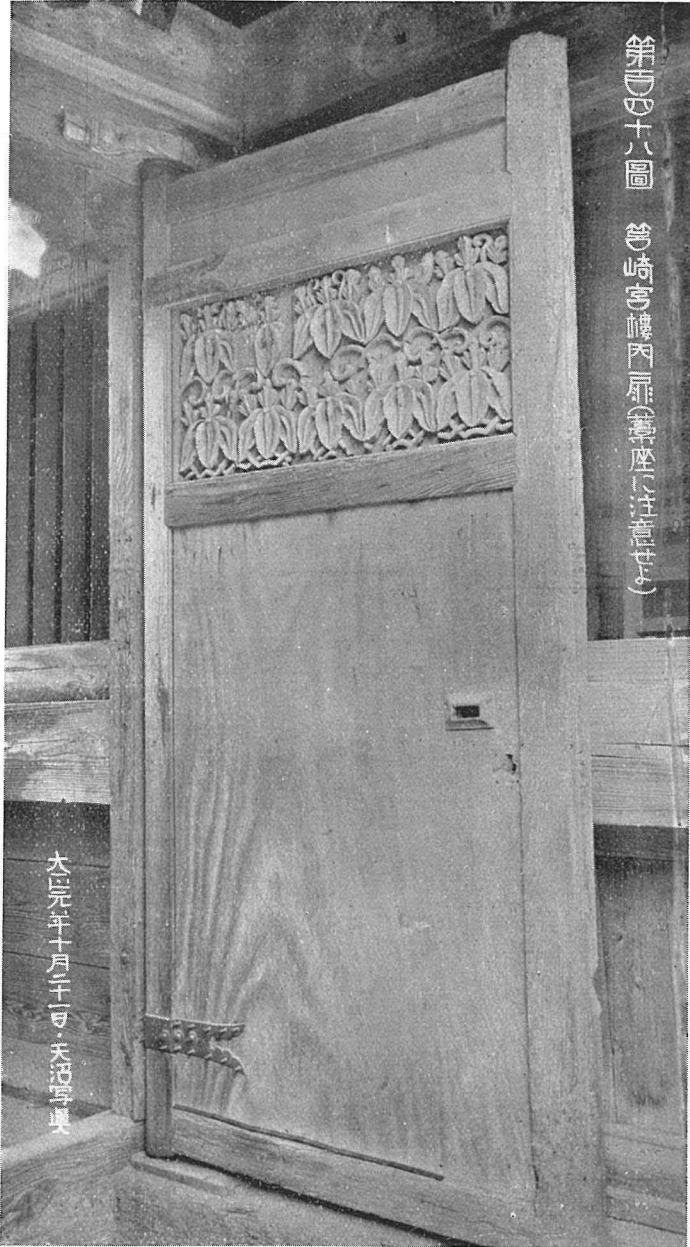




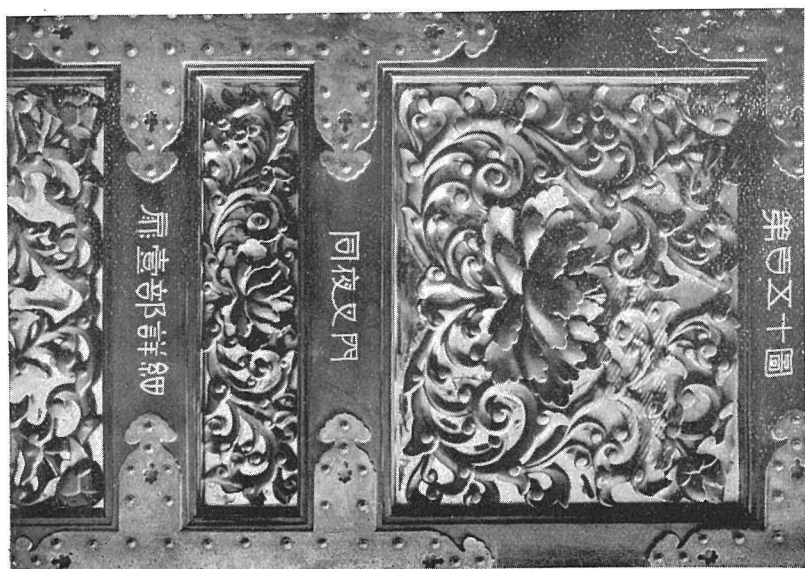
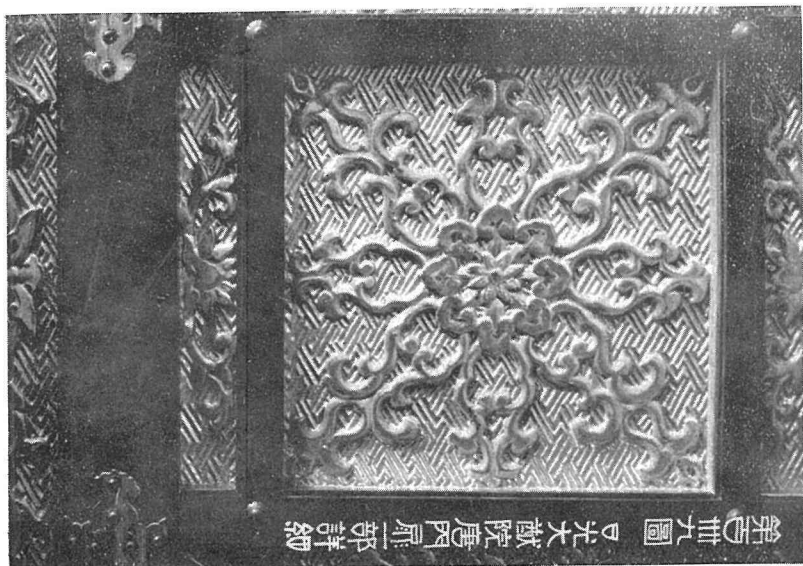
第百四十七圖 諏訪神社(工事)棧唐戸 (原写真今共真桐氏寄贈)

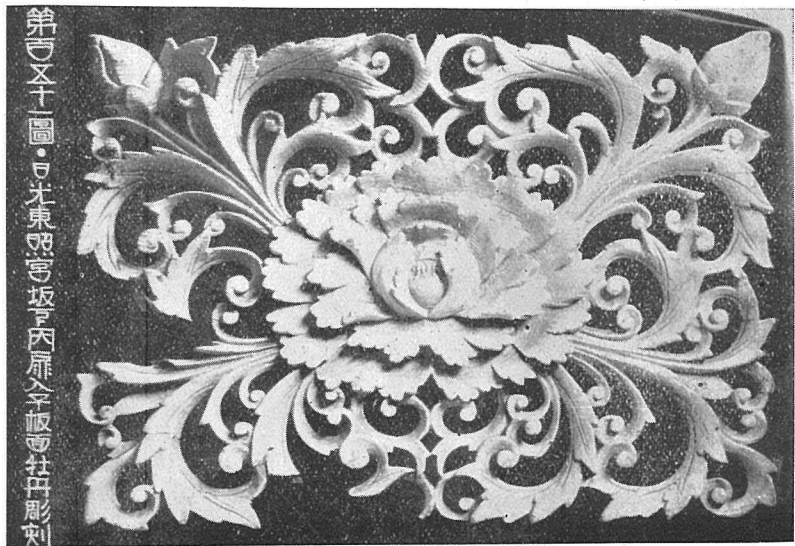
第百四十八圖

笠崎宮樟内扉(舊座に注意せよ)

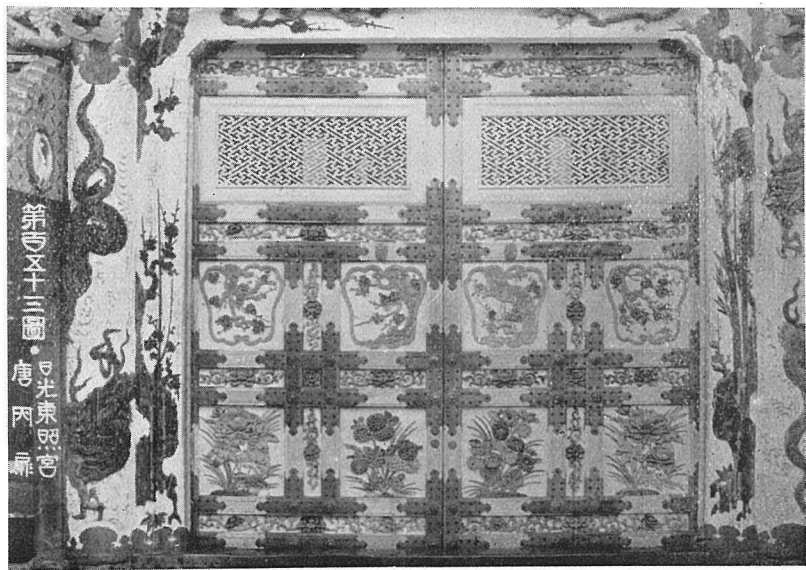


大正元年十月二十日・天沼淳真

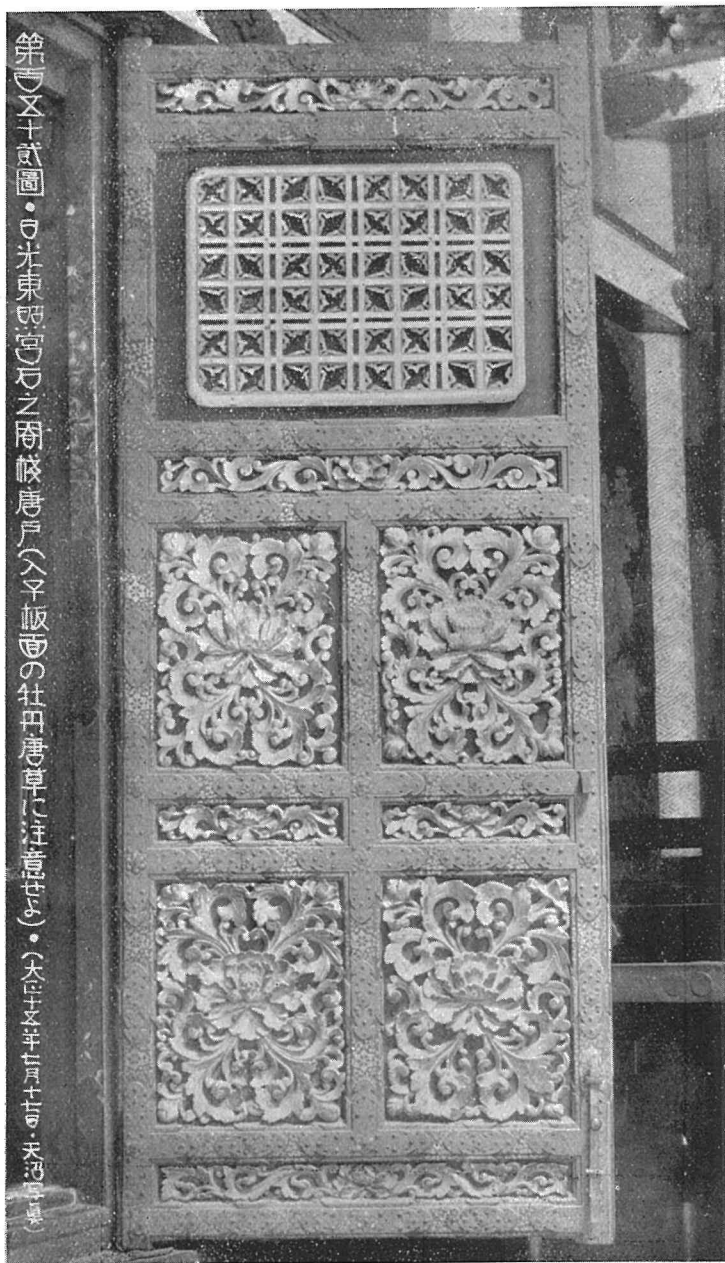




第百五十二圖・日光東照宮坂戸内扉全板面牡丹彫刻



第百五十三圖・日光東照宮唐内扉



第百五十五圖・日光東照宮石之閣帳唐戸（入平板面の牡丹唐草に注意せよ）・大正十五年七月十七日・天沼野景



第四百五十四圖

日光東照宮唐内扉壹部 (大正十五年七月十五日天沼寫)

第百八十五圖

日光大猷院相之内兩折兩因校唐戸壹部

(大正十五年七月十七日・天沼写真)



ので、骨と板とは後補かも知れぬ。

第四は少し遠いが、長野縣諏訪郡本郷村(Honjō, Gunma)大字乙事(Onosato)鎮座の村社諏訪神社の扉を例に引く(第百四十二圖)。勿論扉のこと丈け記せば、いゝのだし、またさうすべきであらうが、殆んど其地方の人すら何とも思はず、僅に上諏訪町所在の信濃教育會諏訪部會幹部の人士の注意を惹いてゐたに止つた、當代稀にみる優秀なる建築が、例へ小さいものにせよ、邊鄙なところに残つてゐるのだから、この機會にこの建物のために十數行を費しておき度いと思ふ。

社は俗に「乙事の諏訪社」と呼び、さういつた方が早判りがするさうであるが、本名は「諏訪社上ノ社」といふのださうな。延徳二年勸請、文祿二年八月、今の官幣大社諏訪神社より神前の假殿を移建し、文化八年七月、京都から諏訪神社を分靈し、乙事の總社にしたといふ。

嘉永年間に諏訪上社の拜殿を、前例によりとして此の社にやつてしまつたのである、夫れはこゝ

任 舊 例 今 般
古 神 前 其 郷
勸 請 社 相 納 候 如 件
諏 訪 宮
嘉 永 配 年 八 月 神 長 官 禰
禰 宜 大 夫 御
權 祝

上部は冠木より上にのびて軒天井を貫き小屋組に入つてゐるため、總て挿肘木を用ひてゐる。軒天井のそと、二手先と三手先との間には支輪を用ひてゐる。さうして小脇羽目・扉・脇障子等には一面に彫刻——牡丹及び梶の葉と花——を入れ、隨所金銅飾金具を打つ。

拜殿の料拱は「三斗」である。料拱間は下方に臺輪、上方に大虹梁があるから、平たい長方形の場

に示した様な文書が残つてゐるので判る。建物は一間一面向唐破風勾欄附の拜殿で、其突き當りは一間一戸の四脚門で、兩側に脇障子があり、料拱は三手先であるが、柱の

所ができてゐて、其中央に慕股がある。これ丈けでは極めて平凡であるが、此の場合にはこの間に板を入れ、板の面に平たい薄肉の透彫が入れてある。而も其透彫は四方共異つてゐる。慕股内の彫刻また然り、さうしてこれは桃山式といふよりは寧ろ室町式、即ち鎌倉系統の左右相稱式、換言すれば中央に花が咲き左右に唐草のある式のものである。空間を充たしてある透彫もまた寧ろ室町式といふべきである。

其一例として正面のをとつてみる。慕股の左右には「かぢの葉」を一面に入れてあるが、向て右の方の組物に近いところに小鳥が二羽とまらせてある。葉は綠色であるから、全體が緑に見えるところに、小鳥は腹が紅で背が黒(さ記憶してゐるが間違つたかも知れぬ)なので、これがおそろしく引立つて見え、ために左右同じく見えず、一寸したところで最も手際よく單調を破つてゐる。萬事がこの調子だから、小

な拜殿と小さな四脚門とであるが、其價値は極めて大きいと愚考する。萬一幸ひにして古社寺保存會委員諸君子の注意を惹き、好機に一瞥を與へらるれば、例へ特別保護の恩典に浴するを得ずとも洵に光榮の至りである。事程左様に優秀な建造物である。但し本殿は此れ等に比べると、遺憾ながらさう大したものではない様である。

以上少し長過ぎたかも知れぬが前置である。そこで目的の扉は、第百四十七圖に示した通り、花狭間の部分を除いては、一面に薄肉彫刻が入子板の面につけてある。最下の間は一種の曲線輪廓の間に横貫連子入で、最上の間は中央に劍花菱(こ)に唐草であるが、あとの四間には「かぢの葉」が詰めてある。このかぢの葉は全部緑——白緑であつたと思ふ、原は綠青であつたのが剝落したのかも知れぬ——である。其上の花狭間は多くの場合と少しく趣きを異にしてゐるので、第百四十二圖⑥

に大きくかいておいたが、これは箔置であつたと記憶する。扉の棧や框は黒で、飾金具は金銅であつたと思ふほかは、つい記しておかなかつたので色彩を忘れてしまつた。

とにかく圖でも判る通り花狹間と梶の葉とで大部分を占めてゐる、だから一見扉は「緑と金」とで非常に美しい感がある。さうして周圍の裝飾も色彩も、割合にめまぐるしくないので、扉としては當代最傑作の一といふことができやう。

第五にはもつと遠方である筑前宮崎宮、精しくいふと福岡縣粕屋郡箱崎町の官幣大社宮崎宮樓門の扉であるが、これは第百四十八圖の通り横棧が上の方に二本ある丈で、豎棧は一本もなく、また棧唐戸には多くの場合、八双は用ひぬ様であるが、これは上部は棧の上、下部は適當な位置に入双を打つてあるのが珍らしい。

扉の面は上の方の二本の棧の間に、桐葉が十枚

二列に並び、其間に空隙は簡單な唐草で充たしてある。この寫眞は大正元年十月二十一日にとつたもので、大分昔だつたし、手控もないので裏面がどんなであつたか、正面と同じ様に桐が入れてあつたか否か、まるで記憶がないので書くことができぬ。いづれ將來都合がつき次第もう一度見學するつもりだから、其時不足は補ふ事にするが、裏に桐が入れてあるか、左もなくば略してあるかの二つに過ぎまい。

もう一つ注意しておくべきは、上の方についてゐる龕座で、其下端に唐草をつけた入念のものである。この様に叮嚀なのはまたつい見當らぬ。

第六に、これは寫眞も製圖も間に合はなかつたので、惜しかつたが今回は圖を略したが、近いところだから行つて見さへすれば判る、即ち京都市の有名な高臺寺靈廟の内外陣の間の中央の間に吊つてある兩折兩開の扉の紹介をする。これはざつ

と堅框の長^{7.3}、吊元・手先と合せて框外法^{4.2}ある可なり大きなものだが、作りは甚だ花車である。吊元の框から更に断面圓形のくり出しがでて、夫れが上下の藻座に入つてゐて、夫れで回轉すること第百三十一圖[㊦]・[㊧]、第百三十六圖[㊨]の様であるのは、此の寺が初め曹洞宗であつて、後臨濟宗になつたのださうだが、何れにしても扉の制またよく其宗旨を現はしてゐるといへる。其框や棧の辻には、割合に小さき辻金物を打ち、蝶番また多くの場合と多少其制を異にしてゐる。

扉は全部黒漆塗で、棧・框・其几帳面・入子板等皆同色であるが、上の方に入れてある花狭間のみ極彩色がしてある。この部分は高^{6.15}・申^{1.57}で、其内に申^{1.3}の框をくり、此の框また黒塗とし、四隅に飾金具を打つ、更にこのうちに申^{0.25}の輪廓を廻らしてあるが、これは朱漆をぬつてある、さうして其内に「立涌」、其中央に圓内に山吹(?)の紋章が入

れてある。今は臨時に裏から紙が貼つてあるが、元よりこれは貼らぬがほんどうである。

立涌には緑青をぬり、中央の圓は黒、山吹(?)の花は金箔置にしてあるから、甚だ綺麗である。此の扉の兩脇の間は、二本溝をついた敷居と鴨居とがあつて、建具は現在のところないから、どうであつたか初めのことは判りかねるが、其上の欄間またこの立涌花狭間と同意匠で、緑青塗の透彫立涌の間に、同じく透彫の山吹(?)の花が三つづつ適當に散しになつてつけてある。

花狭間を普通の型にせず、曲線形の立涌にしたところは新しい考へであらう、ことによつたら前代位にあるかも知れぬが、私は實例をしらない。

同寺開山堂の扉の花狭間は、第三に擧げた乙事の諏訪神社門の夫れと同じ様な意匠である。

未だ他にも例をあげ出したら限りがないが、ほんものゝ扉はこの位でやめ、次には小工藝品即ち

厨子の扉の例を二つばかりあげておく。

鎌倉の圓覺寺舍利殿内にある厨子の兩折兩開板扉は、第百四十二圖③でみる様に割合に細長く、上から二つ目の入子板には、輪廓は餘りよくないがよく時代を現はしてゐる格狹間がついてゐて、其内に透彫が一面に入れてある。圖に於いて白いところは實質で、黒いところが打抜きの部分である。框・棧の辻には飾金具の代りに、割合にぞんざいな輪廓と其面に唐草をかいた金蒔繪がかいてある。入子板も面も金で甚だきれいなものである。格狹間・其内容・飾金具代用の金蒔繪・其上の唐草等、何れも感服はできぬが、それにしても全長僅に75・巾44の小さいものだから、大きいものと同じにはいかぬ。吊元と手先との間にある蝶番の飾金具は、これも極く小さいものであるが、これは其割に輪廓も毛彫の唐草も共に中々のいゝでき榮である。

第八即ち最後には、一つ前に記した高臺寺に遠

くない貞治二年と稱する特建を有する六波羅密寺本堂内にある閻魔大王座像の厨子の扉をだしておく(第百四十三圖)。これは元來清盛が入つてゐたのであるが、目下博物館へ出張の留守中、臨時閻魔に貸してあるのださうな。厨子其物はさして騒ぐ程のものではない。けれども扉には面白いところがある。

圖は右側のである。左側のは定規縁が框からくり出してあり、其面には多くの飾金具を打つ。定規縁のくり出したのは、榮山寺八角圓堂の扉に於いてみた(第十一卷第四號第百二)以來、ほんどうの扉には見出さぬ。厨子の様な小工藝品にあつたかどうか、これはつい氣がつかかなかつた。

豎横の框の出遇ふところ即ち四隅には大きな飾金具、棧と棧又は棧と框と出遇ふところには割合に大きな四葉が打つてある。これ等は何れも金銅で

夫れく面に唐草又は花模様はほりつけてあり、精巧なものではないが、時代の精神はよく現はれてゐる。

椀及び棧の面は几帳面で、縦横の木が圖に示してある如く通つてゐる。さうして面は、叮嚀な仕事では、例へば第四百十圖[㊦](第十三卷第一)の如くに「とめ」にするので、かうやつておけば見たところも甚だよろしいが、少し金はかゝる。併し大概はかうしてある。然るにこの場合にはこれ程の間をかけず、面にかまはずに縦横の木を「合缺き」(Halving) として、「とめ」(Mitre) になる丈けの数を省いてゐる。併しながら紙を貼つた明障子の或る場合の如く、堅棧より横棧の奥行を少し少なくし、堅棧の面内に面を取つた横棧を缺き込まぬ限り、即ち堅横の棧が所謂「つらいち」である以上かうしたところで其交叉點は、小刀を用ひて丹念に削つてとめにしなければならぬから、「面押

し」(例へば第三百三十三圖[㊧]、其他實例)にするのどさう大(多く、殆んど總てがかうである)して差がない。大きなものでかうすると多少目立つが小型のものはこんなのも相當にあるやうである。修學院離宮の袋戸棚の小さい引違戸の面にあつた棧は、切面がとつてあつたが、やはりこの扉と同じ様に一方の棧を通してあつた事を覚えてゐる。現に今の場合に於いても、棧の見付は面共¹²あるが、黒漆塗になつてゐる上、辻には大きな四葉が打つてあるから、うつかりみてゐたのでは、左様なことは全く氣がつかぬのである。第三百三十圖[㊨]、[㊩]の上の格子——[㊪]、[㊫]に、其詳細圖をだしておいたが(前號第二頁)——の堅横の子も亦、切面を取つたのが組んである。

全體としては普通の扉と變りはないが、上方の廣間に牡丹が入れてある。尤もこれは正面ばかりで、裏面には何もつけてない。牡丹の中央の花も其左右の唐草も、中心線に對して左右相稱ではな

く、一見同じ様であるが大分に異る、さうして左右の扉では、一方の反對の向きに一方がつけてあるので、即ち扉の召合せに對して左右が相稱になつてゐる。

此の牡丹のところがきれいな花狹間となり、さうして他の間へもつと込み入つた牡丹が入ると、日光東照宮の夫れになるのである(第百五十二圖)。さう思

つてゐると、薄暗いところにおいてあり、時々拜觀者のために開閉さるゝこの小さな扉でも、うつかりとみてゐることはできなくなる。これが善美を盡した日光廟建築の中の盟主たる東照宮の拜殿石の間・本殿の扉の原だなごといつたら、左様なことがあるものかと、殆んどすべての人は否定するであらうが、模様の進歩發達の上からさう思へぬこともあるまい。

例にはあげなかつたが、本派本願寺四脚門の扉は縦横の棧が吹寄になつてゐて、小間には牡丹唐

草、大間には獅子、上の大廣間即ち普通花狹間を
入れるところ(即ち此の厨子の牡丹唐草の入れてあるところ)には、牡丹に唐獅子の透彫がしてある。此の門はいふ迄もなく伏見城の遺構で、寛永九年に現位置へ移建したものであるが、この門が一轉すると、今記した東照宮(牡丹唐草)及び同日光大猷院の扉(獅子何れも)になるのである。尙ほ當時は聚樂第の様な、模範的宮室建築もあつたから、牡丹唐草入の扉などはいくらもあつたらうと思はれる。

さうすると、何もこの貧弱な厨子の牡丹が發達しないでも、もつといふ例がいくらもあつたらしいが、夫れは今大部分亡くなつてしまつたし、この扉からもさう考へられぬことはないのである。といふことが了解できればいふのである。其ために殆んど省みられないでゐる扉を偶然見出したので、圖示して聊説明を試みたのである。

以上の八例で一通りのことは判る筈である、そ

こで當代の扉を手短かに記してみると

棧及び框には全く面をとりぬものもあつたが、

(豐國神社)多くは几帳面に近い面をつけた。相當に立

派なものでも、場合によりては裏面は横棧位を

打つて至極簡單に仕上げたのがあつた(大徳寺)。棧

には單獨のと、横が吹寄のと、時には豎横共吹

寄になつてゐるものもあつた(本派本願寺)。此れ等の互

に出遇ふところには、四葉或は辻金物を打つ。

前者の場合には、其距離間隔の大小に應じ、適

宜に桐又は長手の金具を以て更に其間を飾る。

棧と框とでできた區劃の内、上の方の大きな廣

いどころには普通花狹間を入れる。其花狹間に

は、透彫立涌の中に紋章を入れたり(高臺寺)、ま

た連子(醍醐三寶院勅使門)其他(舊崎宮機門)の時もある。小工藝

品に於いては、このところは透彫格狹間(圓覺寺舍利殿

内厨)・牡丹唐草(六波羅密寺厨子)等を入れたりした。これ

等の工藝品の多くと、建造物に吊込みたる扉の

少数(其一例は)は、入子板の全部若くは大部分に

は何等の彫刻を入れぬが、後者の大多數は彫刻

を充填した。其方法は透間なく入れた(諏訪社)の

と、さうでもない(豐國神社)のと、兩方を兼ねた

(本派本願寺)のとあつた。さうして充填する彫刻の材

料は、動植物及び自然物(獅子・牡丹・雲等)であつた。

となるであらう。

框や棧に飾金具を打ちだしたのは當代からの様

に思ふ。室町には未だこの程までに發達はしてゐ

なかつたらしい。扉の多くは前號諸圖に示したや

うな、鎌倉系統の割合に簡單なものであつたが、

當代に入つて彫刻繪畫の建築應用の盛になるに連

れ、斯様に飾金具が賞用せられたのであらう。

* * * *

扉に就いての記事は、初めから三回を以て終る

つもりで、最初と其次とを上・中とし、今度が下で

丁度よくなる豫定のところ、成るべく判る様にす

るため、圖を餘計に入れた結果、豫定の枚數を大々的に超過することになり、どうしても今度きりではおさまらなくなつた。そこで體裁はまづいが今回を「下の二」次を「下の二」として、愈無事終了する筈になつた。即ち「下の二」は桃山時代丈けの説明に止めた代りに、圖版丈けは江戸時代まで殆ど全部入れることにした。第四百四十三圖に掲げた扉の牡丹唐草と關係のある江戸時代の扉は、かうしてつゞけてみた方が、次回にはなすより便利だからである。かうして圖を比べてみると、説明はなくとも、大概想像はつく筈である。

* * * * *

未だこの他に、少しく訂正増補をしたいところがあるが、前述の理由により總て七月まで延期とする。前號に豫定した扉附屬の「藁座」と「唐居敷」も、勿論次に廻す、ことによつたら此れ等は十月になるかも知れない。(昭和二年三月一日稿了・火曜・晴)